『 On-line みんなで法華経を学ぼう！ 』 vol.2

May.2022

── Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

（みんなで"法華経観"を見つける旅に出よう）

『無量義経（むりょうぎきょう） 徳行品（とくぎょうほん） 第一』 （序 分）

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 （法師品 二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』（方便品 八十二頁 四行）

○ 「習学」の３つのステップ 「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 （法師品 二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 （『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行／P5・1行）

◇ ◇ ◇

＜あらすじ・まえがきの復習＞

- 開祖さまが命を賭け、魂で読み込まれた法華経のご解釈を学ばせていただく。
- **「新釈法華三部経」発刊に込められた開祖さまの願い（主旨・主眼）は**
  - 教えを日常生活にいかに実践すべきか。
  - 〈宗教の本義〉を明らかにしたい。 ──「融和と協調」の場を築く。
- 十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進。
- 法華三部経は、あくまでも**「実践と努力」**の教え。
- インドで〈仏法〉が生まれ、中国で〈理〉の花が開き、日本で〈事〉が完成。
  ── 2500年の仏教伝播の尊い流れの中にいる「私たち」の因縁の尊さ。

『南無妙法蓮華経』を唱えるとき、「ああ、ありがたい妙法蓮華経！ 私はこのお経の真実の教えに全生命をお任せします！」と発する心の声で唱え、その受持と実践との「信念」を心に固く植え付ける。

◇ ◇ ◇

＜徳行品のあらすじ＞

【一頁 二行】（『是（かく）の如きを我聞（われ き）ききぃ』） **私はこのように聞いております。**

釈尊が王舎城の霊鷲山にいらっしゃった時のことです。静かに端座しておられる釈尊のまわりには、大勢（一万二千人）の大比丘、（八万人の）菩薩や、鬼神、動物の神々、他教（バラモン教）の神々、出家修行者、在家修行者、諸国の王たちやその家来たちが詰めかけています。／（『佛所に來詣（らいけい）して頭面に足（みぁし）を禮（らい）し、～香を焼（た）き華を散じ、種々に供養すること已（おわ）って』） そしてあらゆる人々が釈尊のみ足に額を付けて礼拝し、様々な供養を行っています。

【菩薩の徳分について】―――

【一頁 終四行】 ここに集う文殊菩薩、弥勒菩薩、薬王菩薩、観世音菩薩をはじめとする八万人の菩薩たちは、どんな変化にも動揺せず世間の苦悩から解放され、／（『皆是（みな こ）れ法身（ほっしん）の大士（だいじ）ならざることなし』）真理と一体となった菩薩たちです。

【二頁 四行】（『戒・定・慧・解脱・解脱知見の成就せる所なり』）菩薩たちは**『三学』**という仏道修行者が修すべき基本の道**「戒・定・慧」**を修め、**解脱**しており、しかも解脱に至るまでの具体的な手順・経緯（プロセス）をしっかりと自覚、**解脱知見**しています。

【二頁 五行】しかもどんな境遇にあっても、とらわれることなく安らかで**（恬安・てんなん）**、他人に対して要求する心はなく、不平不満を覚えず、たとえ好意や感謝をされなくても、そのことにこだわることはありません**（憺怕・たんぱく）**。自己中心的でなく、我欲から離れており**（無為無欲・むい むよく）**、／（『顚倒亂想（てんどうらんそう）復入（また い）ることを得ず』）真相を見誤って真理と反対の見方をして、心が乱れることもありません。静かに落ち着き、煩悩に惑わされない澄み切った心**（静寂清澄・じょうじゃく しょうちょう）**で、甚深微妙で奥深く**（志玄・しげん）**、限りなく広く大きな心を持っています**（虚漠・ こまく）**。こういう心境を億千万年という長い期間保ち続けていますので、動揺することがなく／（『性相（しょそう）の眞實を曉了（ぎょうりょう）し分別（ふんべつ）するに』）、仏の全ての教え・この世のあらゆる物事の真相を正しく見極めています。すべての出来事を正しく分析・解説することができ、あらゆる人びとの機根・性質・欲望**（根性欲・こんじょうよく）**を見抜いていますので、善をすすめて悪をとどめる強い力と、どんな人をも納得させる説得力を持っています。ですから自由自在に人びとを教化することができるのです。菩薩はこのような尊い徳分を具えています。

【菩薩の教化の仕方について】―――

【二頁 終三行】**菩薩たちの【教化の仕方】**というのは、／（『微渧(みたい)先(ま)ず墮(お)ちて以て欲塵(よくじん)をひたす淹(ひた)し』）あたかも乾いた土に一滴の「しずく」が落ちると、そこには砂ぼこりが立たなくなるように、まず些細（ささい）な教えから入って行き、数多い欲の中でわずか塵ほどのものを鎮めていきます。／（『涅槃の門を開き解脱の風を扇(あお)いで、世の惱熱(のうねつ)を除き法の清涼(しょうりょう)を致す』）そして、悟りへ門を開き、

解脱へと誘（いざな）って行きます。それはまるで涼しい風をそよがせて熱を取り除いて冷（さ）めさせるように、人々を苦悩の熱から救って行くのでした。

【二頁 終二行】次に ❶深遠な**「十二因縁」**の教えを説いて**無明**の状態から解き放ちます。それはまるで照りつける灼熱の太陽に苦しむ人が、雨を得て蘇生の喜び得るようであり、❷そのうえで無上の教えである**「大乗の教え」**を説いて、人が本来具える**「善の根」**に潤いを与えます。 ❸さらに善行を呼び起こす**「善の種」**を蒔（ま）いて、ついにはあらゆる人びとに ❹仏の悟りの**「芽生え」**を起させるのであります。

【菩薩の徳分について】―――

【三頁 二行】（『智慧の日月(にちがつ)・方便の時節・大乗の事業を扶蔬増長(ふそ ぞうちょう)して ～ 無量の大悲、苦の衆生を救わしむ』） 菩薩たちの智慧は、太陽や月のようにすべてを明らかに照らし出し、しかも人々を導く手立ては、手段も時節も的確です。大乗の救いを進めて、その成果をどんどん上げて行き、すべての人を仏の悟りへと真っ直ぐに導きます。菩薩はいつも智慧を具えていますので、限りない**大悲の心**を注ぐことができ、それによって苦しみ悩む無数の衆生を救っていくのです。

【三頁 四行】（『是(こ)れ諸の衆生の眞善知識(しんぜんちしき)～ 衆生の大良福田(だいろうふくでん)、～衆生の請せざるの師、～ 衆生の安穏の樂處(らくしょ)・救處(くしょ)・護處(ごしょ)・大依止處(だいえししょ)なり』）菩薩は、まさに人々にとって「善き友」であり、幸せを育てる「良い田畑」であり、招かないでもわざわざやって来てくれる「有難い先生」であります。私たちにとっては「心の安らぎ」を与えてくれる存在、人生の「大きな支え」となる存在、私を「守ってくれる」存在、「依り所」となる存在です。

【三頁 六行】菩薩は私たちを正しく導く師であり、目、耳、言葉の不自由な人にとっての耳、目、口となる方です。／（『顛狂荒亂(てんのうこうらん)なるには大正念(だいしょうねん)を作(な)さしむ』）心が乱れ、荒（すさ）み切っている時は、心を安定させ、正気を取り戻させてくれます。／（『船師・大船師(だいせんし)なり、～生死(しょうじ)の河を渡して涅槃の岸に置く』）まるで優秀な船長ようで、人生途上で襲いかかる様々な**「変化・異変」**の荒波を乗り越えさせてくれ、安穏な境地へと誘（いざな）ってくれます。病に応じて的確に薬を与える名医だとも言え、どんな猛獣をも従わせる優れた調教師のようです。

【四頁 二行】菩薩は、仏の悟りに至るためのあらゆる修行・菩薩行を自由自在に行なえ、／（『願力(がんりき)に安住して廣く佛國を淨(きよ)め～』） 一切衆生救済を願う仏の力を信じていますので、「大安心」の心境で法を説くことができます。これらの菩薩は近い将来、仏の悟りに達する方々であり、以上のような大徳を具えています。

【大比丘衆の徳分】―――

【四頁 四行】そうした菩薩と共にこの会座（えざ）には、智慧第一の舎利弗や神通第一の目連、富楼那（ふるな）、阿難、羅睺羅（らごら）など数多く（一万二千人）の比丘たちが連なっています。／（『皆阿羅漢(みな あらかん)にして、諸の結漏(けつろ)を盡（つ）くして復縛著（また ばくぢゃく）なく、眞正（しんしょう）解脱なり』）みな**阿羅漢(あらかん)**の境地を得ており、迷い・

混乱・執着を消滅し、煩悩が出てくることなどありません。物事にとらわれず、正しいはたらきが自由自在にでき、一切の迷いから解放されています。

【四頁 終四行】その時**大荘厳菩薩**は周囲を見渡し、一同全員が釈尊の教えを伺おうということに集中していることを見定めて、釈尊の前に進み出ました。そして様々な供養を成し、釈尊に向かって『**偈**（げ・韻を踏んだ詩歌）』を唱えて讃嘆しました。

【讃仏偈】―――

【五頁 五行】（『大いなる哉(かな)大悟大聖主(だいご だいしょうしゅ)、垢（く）なく染（ぜん）なく所著（しょぢゃく）なし～永く夢妄（むもう）の思想念を斷じて 復諸大陰入界（また しょだいおんにゅうかい）なし』）「大いなる大導師よ。一切の汚（けが）れが無く、どんな現象にも心が乱れず、執着もなく、天界・人界のすべてのものを自由に導く力を具えておられます。その徳の高さは、まるで香（かぐわ）しいお香のように、ひとりでに周囲の人々の心に染み入って行きます。人に対して見返りや、求める心などなく、常に相手の幸せだけを願われます。心にとらわれがなく、常に静かに澄み切ったお心でいらっしゃいます。そして夢想・妄想によって心乱れることなどなく、外界からのどんな影響を受けない超越した境地にいらっしゃいます」と讃歎しました。

【仏は常住不変の存在】―――

【五頁 七行】（『其の身は有(う)に非ず亦無(また む) に非ず～紅（く）に非ず紫（し）種種（しゅじゅ）の色（しき）に非ず』）「仏の存在は、有るとか無いとか世間的な考え方で推（お）し量（はか）ることはできず、形や色を以って示すことができません。まさに、**法身**(ほっしん)・**報身**(ほうしん)・**応身**(おうじん)**の三身**(さんじん)**一体**となった常住不変の存在です」。

【六頁 二行】「仏がこのような尊い存在に、なぜ成ることができたのか？　それはほかでもありません。／（『衆生善業(ぜんごう)の因縁より出(い)でたり』）これまで一人の人間として、何世にわたって**善業を積んで修行してきた結果**なのであります」。

【仏の徳相　三十二相　八十種好・はちじゅう しゅごう】―――

【六頁 二行】「身の丈は一丈六尺、体全体から紫金の輝きを放つなど三十二の徳相を具えています。／（『表裏映徹(ひょうり ようてつ)し淨(きよ)くして垢なし 濁水（じょくすい）も染むるなく塵（ちり）を受けず』）前から、後ろから拝しても透き通るお姿で、泥水に染まることなく、たとえ塵（ちり）が降りかかってもそれで身を汚すことはありません」。仏はこうした三十二の徳相と共に、八十の優れた相(**八十種好**)を具えています。

【仏のこれまでのご努力に対しての感謝 讃嘆 帰依】―――

大荘厳菩薩はさらに讃歎を続けます。

【八頁 二行】「世尊は計り知れない過去から、心と力を尽くしてご修行を重ねて来られました。それはご自身のためではなく、われわれ人間や天上界の人、鬼神、その他あら

ゆる者たちを救う願いのゆえでありました。そして普通の人では到底捨てることのできない「執着」を捨て切られました。すなわち全財産、妻子、ご自身が住んでいた城までも捨て、／(『頭目髄脳(ずもくずいのう)悉(ことごと)く人に施(ほどこ)せり』)ご自身の肉体までも全てを人に捧げて施されました**《布施》**。世尊は諸仏が示した戒律を、／『清浄の禁を奉持(ぶじ)して 乃至(ないし)命を失えども毀傷(きしょう)したまわず』 自らの命に代えてまでも守り抜き**《持戒》**、／(『悪口罵辱(あっくめにく)すれども終(つい)に瞋(いか)りたまわず』) たとえ人から暴力や迫害を受け、ののしり、はずかしめを受けても、ついに一度もお怒りになることはありませんでした**《忍辱》**。長い年月修行を続けても、／『身を挫(くだ)けども倦惰(けんだ)したまわず』 挫折し、怠け、飽きたりして精進の歩みを止めることなどなく**《精進》**。また、昼夜にわたって物事に心乱すこともなく、／『常に禪あり』 常に平らで静かなお心でいらっしゃいます**《禅定》**。この世の全ての道理や法則をわきまえておられ、／『智慧深く衆生の根(こん)に入りたまえり』あらゆる人々の機根に立ち入り、その真相を明らかに見通す力を具えておられます**《智慧》**。世尊は今や、どんな人も自由自在に導くことのできる力を有し、あらゆる人々を正しい道へと導く**『法の王』**となられました。私たちは世尊に額づいてお讃え申し上げます。世尊は**普通の人間では到底たえられない難行苦行を果たされ、ついに最高の智慧を成就されました。**／(『能(よ)く諸(もろもろ)の勤め難きを勤めたまえるに帰依したてまつる』) **その尊いご努力をなされたがゆえに、私たちは心から世尊を帰依申し上げるのであります**」。と、世尊に、讃歎と帰依のまことを捧げたのでありました。

◇　◇　◇

徳行品(とくぎょうほん)が説かれる理由

(P153・4行／P104・終2行)

お経のはじめに、なぜこうしてもろもろの菩薩の徳を、ことばを極めてほめたたえてあるのかといいますと、いちばん大切な理由は、**その徳の尊さ・美しさを、心に強く焼きつけるためです。**(中略)　それだけでもすでに心はある程度清められ、温められているわけで、**閉ざされていた胸が開け、教えを受け入れる態勢ができるのです。いわば、教えの本番にはいる準備運動というわけ**です。これがたいへん大切なこと。

偈(げ)

(P165・1行／P113・終4行)

偈(げ)というのは詩歌(しいか)のこと。～　仏・菩薩の徳を賛嘆する場合などによく偈をつくって即吟(そくぎん)したのです。また前の散文で述べたことをさらに偈によってくりかえすことも多く、《法華経》はこの偈の美しさでも有名です。

他教を排斥せず

(P98・2 行／P65・1 行)

こういう神々たちが説法の席につらなっていたというのは～ お釈迦さまおよびその教えの素晴らしい**包容性が、ここに表されている**のです。～ 他教の神々をも排斥することなく、説法会に列席させて、教化しようとされているのです。～ 人間以外の～**ありとあらゆる生物を平等に済度しようという仏陀の大きな慈悲**が、こういう形で表現されているわけです。

菩薩 ― 菩提薩埵

(P95・終 2 行／P63・8 行)

〈菩薩〉というのは、梵語のボーディサットヴァ、パーリ語のボーディサッタの中国語訳（**菩提薩埵**・ぼだいさった）の略です。**菩提**とは、仏の智慧もしくは仏の悟りと言う意味、**薩埵(さった)**というのは人ということですから、つまり〈仏の智慧・仏の悟りを得ようとして修行している人〉を指すのですが、大切なことは、自分が修行しているばかりでなく、他の人びとを救うことにも努力している人でなければ菩薩とはいいません。ここが比丘とちがうところです。

《思惟のひととき ①》

『菩薩』というのは「仏の智慧を得ようと求め（上求菩提　じょうぐぼだい）」と「他の人びとを救う（下化衆生　げけしゅじょう）」の両方を行う人のことをいう、と開祖さまはお説きになっています。

では、私は『会員綱領』の「菩薩行に挺身することを期す」との言葉を唱える時、『菩薩行』をどのように捉えて、この言葉を唱えているのでしょうか？

（・・・己の心を清め、高めて行くという「上求菩提」を決意して唱えているだろうか？
「下化衆生」だけに片寄ってはいないだろうか？）

供養

(P101・3 行／P67・3 行)

〈利供養・りくよう〉　香・華・飲食を奉る供養。
〈敬供養・きょうくよう〉　仏さまを敬い、讃歎する供養。（読経など）
〈行供養・ぎょうくよう〉　教えを受持し、実践すること。**（これが最高の供養）**

智慧

(P109・2 行／P72・終行)

〈智〉⇨　多くのものごとの間にある差異を見分ける力です。**〈差別相〉**を知る力。
（**〈分析〉**をする力）

〈慧〉⇨　すべてのものごとに共通のものを見出す力。**〈平等相〉**を知る力。
（**〈総合〉**を知る力）

『戒・定・慧・解脱・解脱知見の成就せる所なり』　（二頁 四行）

解脱知見　(P110・終4行／P74・1行)

自分が解脱していることを、自分でハッキリ認識していることです。～ 自分の現状を自分でハッキリ知っており、どうしてこの境地までのぼって来られたかという経過をも、手に取るように見きわめていなければ、たくみに人を導くことはできません。～ （解脱知見をしていることは）菩薩の資格の一つなのです。

《思惟のひととき ②》

『菩薩』は、**「戒・定・慧（以上の「戒・定・慧」を『三学』という）・解脱・解脱知見」**を成就している（しっかりと具えている）と説かれています。

では私は、特にこの「**解脱知見**（げだつちけん ― 自分が今日まで人として高まって来たこれまでの経緯・育てられてきた経過）というものを、どこまで深く認識しているのでしょうか？　振り返ってみましょう。

（私を育ててくれた人、親のみならず、先輩・後輩など、そうした方々との「触れ合い・ご縁」「語りかけてくれた言葉、教訓」などを思い起こしてみましょう）

『恬安憺怕に無爲無欲なり。～ 静寂清澄に志玄虚漠なり』　（二頁 五行）

恬安憺怕　無為無欲　静寂清澄　志玄虚漠　(P113・終2行／P76・終3行)

「恬安憺怕」―　**〈恬安・てんなん〉**どんな境遇にいても心がそれに引っかからず、いつも安らか。**〈憺怕・たんぱく〉**ものごとにこだわらぬ気持。他人に対して求めることをせず、不平不満を感じず、たとえ他人から好意を示されなくても、それを何とも思わない。

「無為無欲」―　**〈無為〉**自己中心にものを考えない。　**〈無欲〉**欲から離れている。

「静寂清澄」―　静かに落ち着いた、煩悩に惑わされない澄み切った心。

「志玄虚漠」―　**〈志玄・しげん〉**奥深く微妙（みみょう）な境地。

〈虚漠・こまく〉広々として限りなく大きい心境。

《思惟のひととき ③》

「菩薩の徳分」である「**恬安憺怕　無為無欲　静寂清澄　志玄虚漠**」を、ご自身に振り返ってみて、あなたはどのようにお感じになりますか？

顚倒（てんどう）　（四顚倒）　(P115・2 行／P77・終 5 行)

凡夫には四つのまちがった見方があると教えられています。

〈常顚倒・じょうてんどう〉 ── 〈無常〉であるものを〈常〉と考える。
〈楽顚倒・らくてんどう〉 ── もともとは〈苦〉であるものを、一時的な現象だけを見て〈楽〉と考える。
〈浄顚倒・じょうてんどう〉 ── 〈不浄〉なものを表面の姿だけ見て〈浄〉と考える。
〈我顚倒・がてんどう〉 ── 世の中はすべて持ち持たれつで成り立っているのに、自分だけの力で立っているように考える。

『微渧先ず堕ちて以て欲塵を淹し、涅槃の門を開き解脱の風を扇いで、世の悩熱を除き法の清涼を致す』　(二頁 終三行)

《思惟（しゆい）のひととき ④》

『微渧(みたい)先(ま)ず堕(お)ちて以て欲塵(よくじん)を淹(ひた)し、涅槃の門を開き解脱の風を扇(あお)いで、世の悩熱(のうねつ)を除き法の清涼(しょうりょう)を致す』

菩薩は、「ささいな教えから入って、たくさんの欲の中から塵ほどの欲を鎮めさせる」とありますが、私が相手を導く時、または人に接する時、私は・・・
①相手に『微渧先ず堕ちて以て欲塵を淹し』ではなく、
　多くを求めてはいなかったか？
②相手にどんな「風」を吹かせていただろうか？
（風は清涼であっただろうか？　時には暴風雨？　時には火をあおる風？　熱風？）

十二因縁（じゅうにいんねん）　(P123・終 3 行／P84・1 行)

「肉体の生成（外縁起（がいえんぎ））」と「心の成長（内縁起（ないえんぎ））」に十二段階の法則があるという教え。

〈①無明（むみょう）〉⇒〈②行（ぎょう）〉⇒〈③識（しき）〉⇒〈④名色（みょうしき）〉⇒〈⑤六入（ろくにゅう）〉⇒〈⑥触（そく）〉⇒〈⑦受（じゅ）〉
⇒〈⑧愛（あい）〉⇒〈⑨取（しゅ）〉⇒〈⑩有（う）〉⇒〈⑪生（しょう）〉⇒〈⑫老死（ろうし）〉

【十二因縁の外縁起】『肉体』（肉体の生成）の順序 (P124・終3行／P84・終5行)

|←←← 過去世 →→→| |←←←←← 現 世 →→→→→

〈①無明〉 ⇒ 〈②行〉 ⇒ 〈③識〉 ⇒ 〈④名色〉

過去世において輪廻し無明（無智）であった

過去世において無智の行為を繰り返して「業・ごう」を積む

両親の夫婦生活という無明の行為で命を宿し受精後「識」が生ず

「名」は精神、「色」は肉体。この肉体と精神が徐々に整う

←←←←←←←←←←←←← 現 世 →→→→→→→→→→→→→

〈⑤六入〉 ⇒ 〈⑥触〉 ⇒ 〈⑦受〉 ⇒ 〈⑧愛〉 ⇒

「名色」が発達して六根（眼耳鼻舌身意）が心身の中に入る。即ち「六入」

この世に出生して六根が外界に触れその機能が完成

次に、これは受け入れる、受け入れないという感情が生まれる

特に異性を求める心、何かを求めるという心が生まれる。

←←←← 現 世 →→→→| |←←← 未来世（将来） →→→|

〈⑨取〉 ⇒ 〈⑩有〉 ⇒ 〈⑪生〉 ⇒ 〈⑫老死〉

異性や何かを自分のものにしたい所有欲、「取」の心が起きる

「取」の心がはたらいて、異性を得て（有）結婚する

多くが結婚を通して次世代の命を宿し子を誕生させる

この世に生まれた者は憂悲苦悩を繰り返し、ついに「老死」に至り、人生を終える

【十二因縁の内縁起】『精神』（心の成長）の順序 (P127・終2行／P86・終4行)

|←←← 過去世 →→→| |←←←←← 現 世 →→→→→

〈①無明〉 ⇒ 〈②行〉 ⇒ 〈③識〉 ⇒ 〈④名色〉

過去世、無明のために、正しい世界観・価値観を知らない。無視する

過去世、無智のため真理にはずれた行ないをしてきた

母の胎内で受精して識が生まれ、それは過去世の「業」に因る

「名」は精神「色」は肉体母体内で心身が徐々に自分の存在を認識する

←←←←←←←←←←←←← 現 世 →→→→→→→→→→→→→

〈⑤六入〉 ⇒ 〈⑥触〉 ⇒ 〈⑦受〉 ⇒ 〈⑧愛〉 ⇒

「名色」が発達して六根（眼耳鼻舌身意）の機能が整う。六根が入る

この世に出生して六根が外界に触れ、物事を見分ける力が発達

好き嫌いが起こり感情が生まれる。感受性が発達する

感情が起きれば、物事に対する愛着が生まれ執着の心が起きる

←←←← 現 世 →→→→| |←←← 未来世（将来） →→→|

〈⑨取〉 ⇒ 〈⑩有〉 ⇒ 〈⑪生〉 ⇒ 〈⑫老死〉

好きなものを求め、嫌なものを排除する「取捨選択」の心

「有」とは差別の心。差別心に基づいて、自我を主張する

差別心の主張を繰り返し、人と人との間で対立の人生を送る

思うに任せぬ人生を送るうちにやがて老いがしのび寄り、やがて「死」す。

○ われわれの人生の苦しみは、こういうふうにして生ずるわけですが、その〈思うに任せぬ苦しさ〉の原因はどこにあるかといえば、いちばん根本の〈無明〉にあるのです。

(P131・6 行／P89・2 行)

○ 【十二因縁】の法則は〈三世両重の因果〉ともいわれています。

(P127・終 4 行／P86・10 行)

○ 根本の〈無智〉を捨てて、心を真理のレールに乗せれば、これから先の人生はじつに明るく、安らかになるというのです。反対に、それをしないかぎり、どんなに金持ちになろうが、名誉を得ようが、苦しみはつきまとうものであって、心はつねに六界という迷いの世界を、グルグル回っているばかりだというのです。

(P132・終 2 行／P89・終行)

『智慧の日月・方便の時節・大乗の事業を扶蔬増長して ～ 無量の大悲、苦の衆生を救わしむ』 (三頁 二行)

扶蔬増長　慈 悲

(P139・5 行／P94・終 6 行　P141・終 5 行／P96・1 行)

「扶蔬増長」― 〈扶蔬〉(木の幹から枝がたくさん分かれて伸び行くように)。広く展開する。
〈増長〉大きく伸び、成長発展する。

「慈」― 人を幸せにしてあげたいという〈心〉。**(慈しむ心)**

「悲」― 人の苦しみを取り除いてあげたいという〈心〉。**(まずは、悲しみを受容する)**

《思惟の、ひととき ⑤》

『無量の大悲（だいひ）、苦の衆生を救わしむ』
「限りない大悲の心が、苦しみ悩む衆生を救う」。
人を慈しみ、施す「大慈」ではなく、まず相手の悲しみ、苦しみを受け入れ、その苦を取り除こうとする「大悲」の心が、人々を救うというのです。
この経文を、じっくりと味わってみましょう・・・。

私はこの「大悲」の心（悲しみを受容する）で人々に触れ合っていたか？
（人の痛み悲しみを、我が痛み、悲しみとすることができていたか）振り返ってみましょう。

『衆をして疾く阿耨多羅三藐三菩提を成じ』　（三頁 三行）

疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずる

(P140・2 行／P95・2 行)

この**〈疾(と)く〉**というのは、時間的なことをいうのではなく、**経路のことをいう**のです。すなわち〈まわり道をしないで、まっすぐに〉という意味です。（中略）　最短通路であるこのハイウェーをまっすぐに行ったほうがいいではないか……　というのが**〈疾く〉**の意味です。**その最短通路である大道が、すなわちただ一乗の法華経の教え**であることはいうまでもありません。（中略）

われわれは**凡夫の身ですから、五官の快楽からすっかり超越することはむずかしいでしょうが、できるだけ高い精神の喜びを人生の快楽と感ずるように心を切りかえてゆきたいものです。すなわち、**いい教えを聞く喜び、いい本を読む楽しさなどが、それにほかなりません。

『是れ諸の衆生の眞善知識、是れ諸の衆生の大良福田、是れ諸の衆生の請せざるの師、是れ諸の衆生の安穏の樂處・救處・護處・大依止處なり』

（三頁 四行）

『麻の中の蓬、筒の中の蛇、よき人にむつぶもの、なにとなけれども心振る舞ひも言も直しくなるなり。法華経もかくの如し』

（日蓮大聖人・随自意御書）

仏の三身

(P173・終 4 行／P119・1 行)

〈法身・ほっしん〉　宇宙のあらゆる物事を存在たらしめている〈法〉そのもの。
〈真如〉。〈久遠の本仏〉。真理と一体の仏。
〈報身・ほうしん〉　真如が我々の理解できる姿。**「真如から来た」**の意。**如来。**
〈応身・おうじん〉　人間としてこの世に出て来られた仏。2500 年前の**人間釈尊。**

『慈悲・十力・無畏より起り、衆生善業の因縁より出でたり』　（六頁 一行）

釈尊は生きたお手本

(P178・終 3 行／P123・終 4 行)

まるっきり我々とは違った、真似をしようにも及びもつかぬ方のような感じをいだいてきました。ところが、そういう**最高の境地も、じつは**（一人の人間として）さまざま

な修行の結果達せられたのだということが、ここに明らかにされているのです。

《思惟のひととき　⑥》

『衆生善業（ぜんごう）の因縁より出たり』
① これまで信仰をしていたおかげで、得ることのできた私の徳分（良いところ）とは、何でしょうか？
② また、その徳分を伸ばしていくためには、今後、何を心がければよいでしょうか？考えてみましょう。

○【仏の徳相　三十二相】

『表裏映徹し浄くして垢なし　濁水も染むるなく塵を受けず　是の如き等の相三十二あり』　（六頁 終四行）

『而も實には相非相の色なし　一切の有相眼の對絶せり　無相の相にして有相の身なり　衆生身相の相も亦然なり』　（六頁 終三行）

ジャータカ　（P217・2行／P152・終6行）

（本生譚・ほんじょうだん）にもとづく思想であります。～ お釈迦さまの前世の修行について述べられているものです。

正しい本尊観（釈尊を恭敬・くぎょう する）　（P222・1行／P155・終2行）

この世界において最高の真理を悟り、それを衆生のために説いてくださった最初の仏は、ほかならぬ釈迦牟尼世尊であります。ですから、娑婆世界に住んでいるわれわれが、仏の教えの祖（おや）として恭敬（くぎょう）するのが釈迦牟尼世尊であるべきことは、明白の理です。

『悪口罵辱すれども終に瞋りたまわず』　（八頁 七行）

終に瞋りたまわず　（P223・4行／P156・終4行）

非常に大事なことです。お釈迦さまのご一生の伝記を、どうひっくりかえしてみても、腹をお立てになったという記述は、ただのひとつも見当たりません。徹底した寛容のお方だったのです。この一事をわれわれが真似するだけでも、はかり知れない功徳があると信じます。

《思惟のひととき　⑦》

『悪口罵辱(あっくめにく)すれども終(つい)に瞋(いか)りたまわず』
「釈尊が腹をお立てになったという記述は、ただのひとつも見当たりません」
とあります。
・・・私はどうでしょう？　週に何回「終（つい）に瞋（いか）りたまう」でしょうか？

『能(よ)く諸(もろもろ)の勤(つと)め難(がた)きを勤(つと)めたまえるに歸依(きえ)したてまつる』　（八頁 終行）

勤(つと)め難(がた)きを勤(つと)めたまえる　(P224・6 行／P157・終 4 行)

じつにいいことばです。仏さまの、すべてを成就された相（すがた）だけを賛嘆するのでなく、その境地に達せられるまでの努力というものをほめたたえ、その努力に心から帰依申しあげるというのです。これこそ、現世のわれわれにとって、大きな励ましであると受け取らねばなりません。

⇒ **「六波羅蜜」**を釈尊は貫徹された。（開祖さまも同様）

《思惟のふりかえり　まとめ》

今日の『徳行品第一』の学びを通して、何を学び取ったか？
（または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？）　振り返ってみましょう。

合　掌